

令和五年度

小論文

(60分)

短期大学部 幼児保育学科

解答はすべて解答用紙に記入すること

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開かないこと。
- 二、問題用紙は、表紙を含めて三ページである。
- 三、解答用紙は、一枚である。
- 四、受験番号・氏名は、監督者の指示に従って記入すること。
- 五、問題用紙の余白等は適宜使用してよい。

問題

短期大学部 幼児保育学科

次の文章を読み、以下の設問に答えなさい（問題作成の都合上、一部改変）。

3歳児の悩み

がんばりたいけどがんばれない

2～3歳は、大きい自分を求めてやまない心が高まり、そうならない自分との間で、悩み、^①カットウするときでしょう。「おはようの会」にそんな子どもたちの姿を見ることができます。元気に返事をしてくれる子どもたちもいれば、恥ずかしそうに顔を^②カクしてしまったり、うつむいてしまう子どもも多いのです。友だちが、「じょうずにお返事できたね」と先生にほめられると、「あんなにじょうずにお返事できるだろうか」と思ってしまうのでしょうか。そう思ったら最後、自分の番のときには、返事できなくなってしまいます。

「大きい―小さい」などの^③タイヒ的認識が獲得されてくると、それは友だちと自分の力関係を感じてしまう力にもなってしまうのです。さらに、おとなによって見つめられている自分がわかり、ついつい引込み思案になってしまうのです。これも「できる―できない」に^④カビンになりはじめている「二分的評価」の現れでしょう。

一人ひとりの子どもたちが「おにいちちゃんになりたい」「おねえちゃんになりたい」と願い、しかし、自信がもちきれないなかで、「本当になれるだろうか」と^{注1}かつとうしているのです。そんなとき、しっかりとすること、がんばることを押しつけられたりしたら、「いや」「おかあちゃんのアホ」などことばの限りを尽くして反抗しないではいられない心の段階なのでしょう。いいかえるなら、「おにいちちゃん」「おねえちゃん」としての自分を切実に求めているのです。

こんなとき、子どもたちは「王様」になって舞台上がるあそびが大好きです。舞台上上がるだけで、新しい自分に出会った気分になるのでしょう。さつき、「おはようの会」で返事できなかった子どもたちも、「王様」になるのは恥ずかしかったけれど、「家来」として舞台上上がることができました。それで気持ちも立ち直り、一日元気ががんばることができました。まさに「発達の舞台」です。一人ひとりが自分の光輝く舞台を求めているのです。

障害をもたない子どもたちでも、どんな友だち関係のなかにいるのかは、本人にとってとても大きな問題です。この友だちとの力関係を感じはじめたり、「できる―できない」の結果と評価にか^{注2}びんになりはじめる「二分的評価」の段階は、障害をもっている子どもたちにとって、どんなときなのでしょう。その子がいる集団によって、ずいぶん心のもち方は変化するでしょうが、いつも「できない自分」、「友だちより下手な自分」、「友だちより遅い自分」を感じはじめて、つらい思いばかりしている障害をもった子どもたちはいないでしょうか。友だちに「早くおいで」と手をひかれることで、「できない自分」をいっそう感じてしまう子どもたちはいないのでしょうか。保育所に通う障害児が、ついつい自分のクラスを抜け出して、小さい子どもたちのクラスに行ってしまうこともあるでしょう。自分のクラスの活動が、自分には^⑤トウテイできないことと感じたのか、小さい子どもたちとあそびたいと思ったのか、おにいちちゃん、おねえちゃんとしてかわりたいと思ったのか、理由はひとつではないでしょう。ともかく、理由のない抜け出しはないはずです。私たちは、子どもの心のなかに入りなが

ら、その理由に共感することからはじめたいと思います。そして、その理由のなかで語られている子どもの本当の発達の願いを知り、それにふさわしい保育のあり方をさぐってみたいと思います。ときどき小さいクラスの子どもたちとの交流保育や、障害をもった子どもたち中心のグループ保育を計画することもないかもしれません。

出典（白石正久『発達の扉へ上』かもがわ出版 一九九四年）

注1・2 設問一で出題につき、ひらがなに改めている。

設問一 傍線部①～⑤のカタカナを適切な漢字に直しなさい。

設問二 傍線部㊦「その理由」とあるが、本文中で筆者が想定する三つの例はどのようなことでしょう。本文中の文章を用いて三つの例それぞれについて三〇字以内で答えなさい。

設問三 本文の内容を踏まえて、あなたが考えたことを四〇〇字以内でまとめなさい。